



仁照寺花園だより

船子山 仁照寺
住職 江角弘道
電話:72-8379
携帯:090 4801 9676

新春を寿ぎ 皆々様の
ご安泰をお祈り申し上げます。

3年にわたり新型コロナウイルス感染が継続中です。最近は感染者数も増加の傾向にあり、収まる気配が見えません。私たち一人一人が感染予防に心掛けて生活したいものです。

旧年中はなにかとお世話になりありがとうございました。本年も相変わりにませず何卒よろしくお願い致します。 合掌

令和五年 元旦

本年の主要行事予定

- ・春の彼岸法要、定期巡教
3月11日(土) 午後2時から行います。
- ・出雲郡三十三札所観音霊場参り
5月26日(旧4月7日)～27日(旧4月8日)
- ・大本山妙心寺団体参拝
7月1日(土)～2日(日)の予定で実施検討中
- ・山門大施餓鬼法要・檀信徒総会
8月3日(木)の予定で実施検討中
- ・秋季研修会：出雲國神仏霊場巡拝
11月頃の予定で実施検討中
詳細につきましては別途ご案内いたします。

◇新年写経会◇

本年も中止とします。

昨年行事から

出雲郡三十三札所観音霊場参り(令和4年5月7日～8日)

仁照寺青壮年部の皆さまと一部有志の方で、幟立てや仕舞いをしていただきました。



山門大施餓鬼法要(令和4年8月3日)

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、やむを得ず檀家様のお参りは中止としました。本堂での法要は住職と寺庭の二人で執り行いました。

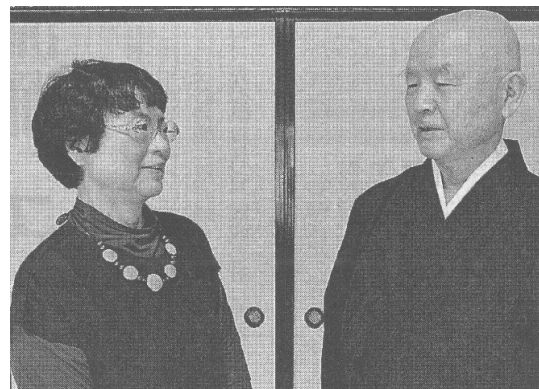
なお、例年法要の後に行っております檀信徒総会は中止としました。



昨年の住職の活動

昨年は下記のような事柄を発信しました。

- 2月 6日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**お地蔵様を巡拝する**」
- 3月27日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**命が大切**」
- 4月28日(木) 出雲高等学校で「**命の授業**」
- 5月 8日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**花祭りとお観音霊場巡り**」
- 5月17日(火) 島根大学で犯罪被害者支援に関する講演
- 5月27日(金) 島根県立大学出雲キャンパスで招致講義
- 6月26日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ
「**八風吹けども動ぜず天辺の月**」
- 7月 6日(水) 松江市立第一中学校で「**命の授業**」
- 8月 2日(火) 朝日新聞島根版記事「**生きるとは 伝える親心**」 (次頁に掲載)
- 8月 7日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**お盆がやってきます**」
- 9月25日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**一刻も早く終戦を**」
- 11月 6日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**食をいただくこと**」
- 11月27日(日) 公益社団法人日本弘道会島根支会で講演「**いのちを見つめて**」
- 12月 1日(木) 山陰中央新報記事「**犯罪被害という不条理 寄り添える社会へ**」
- 12月25日(日) 山陰中央新報**教えの庭から**にエッセイ「**あれから23年. . .**」



令和4年12月1日付
山陰中央新報記事より

20年前 娘を飲酒運転の車が奪った

生きるとは 伝える親心

20年あまり前、飲酒運転の車に最愛の娘を奪われた両親が、命の尊さや当たり前の日常の素晴らしさを伝える取り組みを続けている。全国各地で開いた講演や、遺品の展示はあわせて400回を超えた。ともに70歳を過ぎても続けるのは、娘を失って気づかされたことを伝えたいとの思いがあるからだ。



高校生を前に講演する江角弘道さん

講演続ける江角さん

出雲市の住職、江角弘道さん(77)は4月下旬、県立出雲高校(同市)で2年生と教職員約300人を前に、ゆっくりと「あの日」のことを語り始めた。

1999年12月25日、江角さんの次女・真理子さんはクリスマス前のイルミネーションを見物するため、友人3人と車で岡山県へと出かけた。

その帰り道だった翌26日未明、鳥取県智頭町を走る国道53号のトンネルで飲酒運転の車が対向車線にはみ出し、真理子さんが乗った車と正面衝突

娘の真理子さんの写真を貼ったパネルを見つめる母の江角由利子さん(出雲市今市町)



被害者にも加害者にもならないで

突。真理子さんを含む3人が亡くなり、1人が重傷を負った。

4人は鳥取大学の3年生。真理子さんは20歳だった。大学では英語を専攻し、アルバイトでためたお金で10カ国を訪問。帰国すると楽しそうに旅の思い出話をしてくれた。卒業後は、ツアーコンダクターなど海外を舞台に活躍できる仕事に就くのが夢だったという。

「真理子は20歳のまま時が止まっている。生きていたら、今どんなふうになっていたのかな。結婚して、子どもができていたかもしれない。そう思うと、本当に悔しい」。江角さんはスクリーンに映る娘の写真を見つめながら、今も変わらない苦しい胸の内を語った。

江角さんが真理子さんの死について自身の経験や思いを初めて話したのは、事故から3年が経った2002年。松江市内の高校から依頼され、高校生を前に講演した。「自分たちのような思いを、もう誰にもさせたくない。誰一人として被害者にも加害者にもならないでほしい」と思ったから。自身が、娘の死と向き合うためでもあった。

それからは、妻の由利子さん(74)とともに、県内外で命の大

切さを伝えるために講演をしたり、事件や事故で命を奪われた被害者の写真や遺品を展示する「生命のメッセージ展」を開催したりしてきた。

亡くなった当時の真理子さんの身長と同じ158センチの人形パネルに、成人式で撮った一枚を貼ってメッセージを添え、帽子と靴も並べる。「娘の生きた証しを見てもらうことで、生きることや命の重さを少しでも理解してもらえたら」。時にはウェディングドレスを展示することもある。真理子さんに着てもらったかったという由利子さんの親心だ。

講演で、江角さんが必ず話すことがある。それは、生きていくのは当たり前ではないということ。娘を失って、初めて気づかされたことだ。がんで早世した医師が生前につくった詩を引用しながら、聞く人に語りかける。そして、自分自身にも。

「家族がいて、ご飯が食べられる。笑えるし泣ける、走り回れる。空気をいっぱい吸える。これは素晴らしいことで、生きているのは奇跡的なことなんです。『当たり前』ではなく、『ありがたい』『おかげさま』と生きていけたらいい」(野田佑介)